耳　　塚・・・

春日町の交差点から富士街道沿いに少し西に歩くと、法務局練馬出張所があり、その南西裏手に何やらいわくありげな小さな塚を発見します。その上には祠とともに一基の石碑が立っています。表には「圓浄法師位」の銘が、背には８名の発起人とともに「明治４４年４月建之」の記述があります。

さて、「圓浄法師」とは一体どういうお方なのでしょうか。「練馬の昔ばなし」（練馬区教委刊）をもとに、その概要を紹介します。

昔、上練馬村字中ノ宮（今の春日町五丁目）に大変信仰心の厚い老婆がいました。ある日突然、「もう生きているのが嫌になったので、土中に埋めて欲しい。」と、村人に頼みます。もちろん村人は何とか思い留まらせようと説得しますが聞き入れません。そこで、仕方なく埋めることにしましたが、土中はさぞ苦しいだろうし、腹もすくだろうと心配して、大きな桶を用意し、中に食べ物もたくさん入れました。さらに、ふたに穴を開けて長い竹筒を差し込み呼吸もできるようにしてあげました。

いよいよ老婆は身を清め、鉦を持ってその桶に入り、村人たちに何度もお礼を言ってから、「鉦を打つ音が聞えなくなったら、死んだと思って線香をあげておくれ。」と言いました。

村の人々はその後も心配して、野良仕事の行き帰りには必ず竹筒に耳をあてて鉦の音を聞いていましたが、そのうちに鉦の音もかすかになり、ついにぱったりと聞えなくなってしまいました。

ところが、それからしばらくして不思議なことが起こります。耳の悪い人が竹筒に耳を当てるとよく聞えるようになったり、また花立ての筒にたまった水で耳を洗うと耳の病気が治ったりしたのです。たちまちこのことが遠くまで知れわたり、たくさんの人がお参りにくるようになりました。そして誰言うともなく「耳塚」と言われるようになったということです。

個人的には、信心深い老婆が入定理由に厭世観を挙げているのは合点がいきませんが、明治期に法律で入定禁止令が出されていますので、おそらく村人への気遣いから発したのではないかと想像しています。

いつしかカシノキやケヤキは巨木に育ち、コブシの花が見頃を迎えています。誰一人見向きもしない寂しい風情となった耳塚ですが、是非一度ご供養にご訪問下さい。

「ねりまの昔ばなし」の挿絵より

耳塚全景（平成３年頃）